

十分日本の学会には知られていない、ソビエトにおけるカザフ研究の最近の水準を知ることができる。出版物に関してはほとんど手に入る状態になった今日でも、直接アルヒーフを使用しての研究は、我々にはまだ手に届かないところにあつて、今後もソビエトにおける研究に注意を払っていかなければならぬだろう。ただ、我々はそれと同時に自分の確かな視点をもって、実証的に歴史を明らかにしていくことが責務だと考える。

なお、この会議に関しては、別に、ごく最近、*«Наша вместе. К 250-летию Добровольного присоединения Казахстана к России»*「永久にとともに。ロシアへのカザフスタンの自発的併合二五〇周年記念」と題する出版があつたようだが、評者は未だ見る機会を得ていない。

ホルヘ・ブランコ・ヴィヤルタ著

(ウィリアム・キャンベル英訳)

アタテュルク

護 雅 夫

私は、著者についてまったく知るところがない。序文によ

批評と紹介 護

ると、著者は、その父が、アルゼンチン総領事としてイスタンブルに駐劄し、また、著者自身も副領事をつとめた関係上、一九三〇年から一九三五年まで、トルコに滞在し、その「激動期から得た経験を、本書にそそぎこんだ」という。トルコについては、『トルコの人びと』(一九三六)、『現代イスタンブルからの教訓』(一九三七)、『トルコ文学』(一九四〇)、『現代トルコ文学』(一九四一)、『トルコの芸術と文学』(一九七五)などの著作があるが、これらのほかに、『アメリカにおける儀式的カニバリズム』(一九四六)、『モンローヤ——グアラニー族への伝道師——』(一九五五)、『アメリカ諸州の組織』(一九五八)、『ノブレーガ——ブラジル征服の最初の記録者——』(一九六五)、『アメリカにおけるカニバル儀礼』(一九七〇)そのほかの書物を出版している(以上、すべてスペイン語)。こうした業績目録から見ると、著者は、トルコまたはトルコ史の専攻者とはいへない、難しいようである。

原著は、一九三九年初頭、スペイン語で出版されたが、それを、ブリティッシュ・カウンスルのアンカー・センター所長ウィリアム・キャンベルが英訳し、一九七九年、「トルコ歴史協会」(アンカラ)から出版したのが本書である。「トルコ歴史協会」が本書を公刊したのは、一九八一年がアタテュルク生誕一〇〇周年に当たることを念頭におき、それを記念するためであつたにちがいない。

本書の構成はつぎのごとくである。

献辞、翻訳者、最初の英語版への序文、トルコ語名詞の発音、ホルヘリランコロヴィヤルタの筆になる、本書以外の著作（スペイン語）。

第1部 ケマル特有の個性出現の背景。(1)初期の感奮、(2)政治的動向、(3)諸理想、(4)失望。

第2部 祖国の防衛。(5)トリポリタニア、(6)バルカン戦争、(7)世界大戦、(8)ガリポリ、(9)カフカース、(10)ドイツへの旅、(11)シリア、(12)ムドロス。

第3部 新国家の誕生。(13)帝国の死の苦しみ、(14)ギリシア軍の侵入、(15)ケマルと民衆、(16)防衛、(17)アンカラ、(18)イスタンブルの占領、(19)新生国家。

第4部 全努力。(20)内戦、(21)アルメニア戦役、(22)諸会議と諸戦闘、(23)囚われのイスタンブル、(24)サカリヤ！ (25)平和攻勢、(26)地中海にむかって！ (27)君主制の廃止、(28)最終的勝利——ローザンヌ——。

第5部 共和制と社会的諸改革。(29)共和制、(30)カリフ制の廃止、(31)東南部における火災、(32)服装革命、(33)「テツケ（イスラム神秘主義者修道所）」の閉鎖、(34)法律の諸改革、(35)婦人、(36)火薬と青銅、(37)アルファベット、(38)社会的諸原則、(39)文化、(40)経済政策、(41)公共衛生、(42)外交政策、(43)アタテュルクのアンカラ、(44)死。

年代順索引（主要事件年表）。人名索引（主要人物に関する簡単な説明）。文献目録。

ここで、本書の内容を、章を追って紹介することは、与えられた紙幅がこれを許さない。いまは、ただ、はなはだ印象批評的ながら、私が本書を読んで得た感想のみをしるすに与えたい。

第一に注目すべきは、本書は『アタテュルク』と題してはいるものの、これを、たんなるアタテュルク伝とは評しえぬことである。というのは、著者は、アタテュルクその人と直接関係のない問題にも、ただのアタテュルク伝にしては不相応とも思われるほどの紙数を割いているからである。

たとえば、「初期の感奮」と題する第一章では、アタテュルクの父アリーリルザーが「自由な思想の持主で、帝国の西欧化をはっきり支持していた」のにたいして、母ズベイデが「伝統的な考えをもつ敬虔なムスリムであった」ことがしるされたあとに、イスラム圏における婦人の地位、婦人隔離の問題、彼女たちのうけた教育そのほか、婦人に関する一般的な叙述が見られる。

また、著者は、ほかの帝国と同じく、オスマン帝国にも衰退期が訪れたことをのべてから、それにすぐつづけて、「この帝国がいかなる過程をへたかを見ることにしよう」と言い、トルコ民族のイスラム化からはじめて、ルームーセルジ

ユーク国家に簡単に触れ、ついで、オスマン帝国の歴史を、オスマン時代から、ベルリン条約の調印（一八七八）までたどっている。

さらに、「テツケ」の廃止に関する第三章では、オスマン帝国におけるスーフィズム、スーフィズム教団——ベクタシ教団、ナクシベンディー教団、とくにメウレヴィイー教団など——について、要約的な記述が行われている。

このような叙述方針は、本書を通じて、ほぼ一貫してとられているが、とくにいちじるしいのは、アンカラについてのべた第一章で、ここでは、「アナトリア・トラキア（ルーマリア）権利擁護協会」の「代表委員会」が、その本拠をシヴァスからアンカラへ移したことに関連して、とくにヒッタイト帝国の成立にはじまるアナトリアの歴史が、アンカラのそれを中心としつつ綴られ、これが、本章の大部分を占めている。こうした叙述は、「ケマルが『代表委員会』の本拠として選んだアンカラ」の状態を示すために行われたものではあるが、ただのアタテュルク伝をするすのならば、はるかにしえのヒッタイト帝国までさかのぼる必要はないのではあるまいか。

そのほかの例は、すべて省略するが、上にのべたところだけからでも、本書が、アタテュルクに直接関係しない問題にも、ある程度の重要性を与えていることが明らかかと思う。

批評と紹介 護

第二に、上述した点と無関係ではないが、アタテュルク伝とはいいながら、アタテュルクの公的活動に重点がおかれ、その私的・個人的生活には、それほど筆がおよんでいないことがあげられる。この意味で、本書は、他のアタテュルク伝、とりわけ、H.C.アームストロング著『灰色の狼』(H.C. Armstrong, *Grey Wolf: Mustafa Kemal—An Intimate Study of a Dictator*—, Minton, Balch & Company, New York, 1933)とは異つゞる。

たとえば、アームストロングは、ケマルの青年時代におけるイスタンブル生活をして、「彼は、毎夜、カフェ、レストランで賭博、飲酒にふけて」、いかがわしい場所に入りし、「女性は、彼の性欲を満たす以外には、その生活にはいささかの意味をも有しなかった。彼は、この都市の淫靡な生活にひたりきった」などと書いている。これにたいして、本書には、これに類する叙述はまったく見られない。本書では、ケマルの女性関係については、彼が一四歳のとき、隣家の少女に抱いた初恋と、フランス帰りで教養に富み、「素晴らしい眼、卵そのままの形をした顔、強い意志を示す顎」をそなえた、イズミルの女性ラティーフにたいする愛情、彼女との結婚、そして離婚とがのべられているにすぎない。女性関係にとどまらず、それ以外に関しても、ケマルの生涯における私的・個人的事件にはほとんど触れられていな

いのが、本書の一特徴といいうるのであろう。ちなみに、アー
ムストロングの著書をケマルに見せたところ、ケマルは、
「本書をトルコ国内で発売するのは、自分の死後にしてほし
い」と言ったと伝えられている。

第三に顕著なのは、さきに掲げた章名のうちいくつかが包
括的、あるいは象徴的で、そうした章名だけからそれらの内
容をうかがうのが必ずしも容易でないことである。

ここでは、ただ二例のみをあげるにとどめるが、まず、包
括的かつ象徴的な題名をもつ章として、「ケマルと民衆」と
称する第一章がある。ここでは、一九一九年五月一日日に
ギリシア軍がイズミルへ侵入した翌日、イスタンブルから乗
船したケマルが、五月一九日にサムソンへ上陸して、「トル
コの民衆と接触し、彼らの士気をさぐり、エネルギーを察知
しようと切望して」「できるだけ早くアナトリア内部へ入る
うと決意した」ことがしるされたのち、エルズルム会議、シ
ヴァス会議、「国民誓約」の採択、その内容、「代表委員会」
の選出、そして、アナトリアにおけるこうした革命運動と、
クルド人などをふくむ反動勢力、イスタンブル政府、イギリ
スとの関係そのほかがあつかわれている。これらの問題、事
項は、たとえば、キンロス卿著『アタテュルク』(Lord
Kinross, *Atatürk—The Birth of a Nation—*, K. Ru-
stem & Broder, Nicosia, Northern Cyprus, 1964, 2. edi-

tion, 1981)では、「闘争の開始」、「エルズルム会議」、「シヴ
ァス会議」の三章にかけて論じられている。キンロス卿の著
書が、六〇章から構成されているのにならして、本書が四四
章での叙述を終えている一つの理由はここにある。

つぎに、とくに象徴的な章名としてあげられるのは、第三
六章につけられた「火薬と青銅」である。本章では、主とし
て、共和制および諸改革にたいする反対勢力の根強さ、その
結果おこったケマル暗殺計画、とりわけ、一九二六年六月一
六日、イズミルで発覚した、爆弾とピストルとによる暗殺計
画のべられ、改革者としてのケマルとピョートル一世とが
比較されたのち、ケマルの銅像の、イスタンブルとアンカラ
とにおける建設がしるされ、「イスラムが、絵画によってで
あれ彫像によってであれ、人物像を表現するのを禁じていた
ことからすると、共和国によって建てられた銅像は、ムスリ
ムの伝統からの訣別を示すものであった」と結ばれている。

つまり、章名に示された「火薬」は反動勢力を、また、「青
銅」はケマルの業績とその改革支持勢力を、それぞれ象徴す
る語である。そして、さらに、本章でも、たんにこれらのみ
にとどまらず、そのほかに、ケマルが、第二回人民党大会
で、一九二七年一月一日から連続六日間、三六時間半に
わたって行った「演説(Nutuk)」の内容——ケマルのサムソ
ン上陸からはじまり、「トルコの若者たちよ、諸君の第一の

任務は、民族的独立とトルコ共和国とをまもることである。

諸君は、諸君が必要とする力を、諸君の血管を流れる高貴な血液のなかに発見するであろう」という有名な語で終わる——が要約され、さらに、「トルコ歴史研究協会」(今日の「トルコ歴史協会」の前身)や、第一回国勢調査(一九二七年一〇月)に触れられている。著者がこのような象徴的な章名を付したのは、著者がしばしば文学的表現を用いていることとまったく無関係ではないであろう。もっとも、そうした文学的表現は、章を追うにつれてしだいに影をひそめ、また、アームストロングの著書におけるほど頻繁に使われているわけではないけれども。ただ、私は、ここで、これらを一読して、「トルコ歴史協会」の図書館主任、ミヒン女史が私にもらした「外国語で書かれたアタテュルク伝には、文学的なものが多すぎる」という言葉に同感せざるをえないことをつけ加えておきたい。

本書からうける第四の印象は、著者が、「トルコ言語研究協会」(のちに「トルコ言語協会」と改称されて現在にいたる)文字改革、そして、言語改革に関しては、第三章「アルファベット」と、第三章「文化」とで比較的くわしく——けっして十分とは言えないが——のべているのにたいし、ケマルの主張により、その奨励を得て推進された、ケマル時代におけるトルコ民族史の研究にはそれほど言及してい

ない点である。著者が、第三章で「トルコ歴史研究協会」について一言していることは上述のとおりである。また、第三章でも、「まず、数年まえまでは、トルコ民族史の研究は、伝説、誤り、根拠のない意見によって妨げられて、西洋の歴史家たちは、トルコ民族の偉大な歴史を立証しようとする労をとらなかつたし、他方、オスマン帝国時代には、その研究は、オスマン朝に雇われて、しばしば真実を歪曲し、たんに、その支配者たちを満足させるにとどまった歴史家たちの卑屈さによって妨げられた」、したがって、このように誤つた「トルコ民族史を修正し、専門的研究を開始して、古代から現代にいたるまで、トルコ民族史を構成してきた諸事件の真の連続関係を明らかにし知らせる事業が残っていた」とのべ、「トルコ歴史研究協会」の設立(一九二九)、第一回トルコ歴史会議のアンカラでの開催(一九三二)に触れて、「ここでは、専門家たちが自分の学説、結論を表明し、トルコ民族史をいっそうよく理解するためのきわめて重要な基礎がためをした」と言い、こうした歴史会議の多くをケマル自身が主宰して、そのトルコ民族史、トルコ語にたいする深い造詣で、トルコ人教師たち、外国人トルコ学者たちを驚かせたことをしるしている。しかし、当時の専門家たちの学説、結論、および、ケマル自身の、とくにトルコ民族史にたいする「深い造詣」がいかなるものであったかについては、まった

く記述していない。この点——のみならず、ケマルのといった近代化政策一般に関する叙述の簡略さ——からして、本書は、たとえは、D E H ウェブスター著『アタテュルクのトルコ』(Donald Everett Webster, *The Turkey of Atatürk*——*Social Process in the Turkish Reformation*——, The American Academy of Political and Social Science, Philadelphia, 1939) が、この二章をもうけて、歴史・言語改革に関して詳細に論じているのにはおよばない。もっとも、このウェブスターの著書は、アタテュルクの伝記ではなから、これと本書とを比較するのは無理かも知れない。しかし、前述のキンロス卿著『アタテュルク』および、トルコ・ユネスコ国内委員会『アタテュルク』(The Turkish National Commission for UNESCO with the Assistance of the Co-ordinating Council for the Commemoration of the Centenary of Atatürk's Birth, *Atatürk*——*Biography*——, Turkish National Commission for UNESCO, 1981) のようなアタテュルク伝において、当時のトルコ民族史観について、かなりくわしくしている。第五に、本書の叙述がアタテュルク養父の終始している点に注目されるが、これは、本書が最初に出版されたのが一九三九年、つまり、ケマルが逝去した年の翌年であることを思えば、むしろ当然といえるであろう。また逆に、そうした年

に出版された点に、本書の価値があるのかもしれない。いずれにしろ、本書は、アタテュルク、さらには、彼を中心として展開したトルコ近代史を知り、また、研究しようとするものに多くのことを教えてくれる。ただこのことだけは確かである。

(註) 本書は、最初、U イイディル (Ulug İydemir) による Z カラル (Enver Ziya Karal) のエッセイ集 (Salih Omurtak) に入ったメン (Enver Sökmen) による H (Hasan Sungu) の R ウナト (Faik Redit Unat) の H A ジェン (Hasan Ali Yücel) の共同執筆のものである。トルコ語版『イヌラム百科辞典』の一項目として、一九四六年に出版されたものである。それが、ケマルの逝去二五周年記念のため、トルコ・ユネスコ国内委員会の依頼で、A マンゴ (Andrew J. Mango) による英訳を経て、一九六三年に公刊された。これが、この本である。生誕一〇〇周年を記念して、再版されたのである。

Jorge Blanco Villalta, translated from Spanish into English by William Campbell. *Atatürk*, Türk Tarih Kurumu Basımevi, Ankara, 1979, xv+480pp.